

『地域で高齢者を見守る・支えるシンポジウム』講演録

- 日 時 平成24年10月11日(木) 午後2時
- 場 所 砂川市地域交流センターゆう 大ホール
- 出席者 220名

第1部 基調講演

- 講 師 遺品整理専門会社 キーパーズ(有) 代表取締役 吉田 太一 氏
- 演 題 最後まで孤立しないために ～遺品整理の現場から学ぶ～

【司会 鶴羽 佳子】

皆さんこんにちは。本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。ただいまより「地域で高齢者を見守る・支えるシンポジウム」を始めて参ります。本日の司会進行を担当させていただきます、フリーアナウンサーの鶴羽佳子と申します。どうぞよろしくお願い致します。それではまず、主催者を代表致しまして砂川市長、善岡雅文より皆様にご挨拶です。お願い致します。

【砂川市長 善岡 雅文】

皆さんこんにちは。市長の善岡でございます。本日は地域で高齢者を見守る・支えるシンポジウムにこのように多くの皆さんの参加をいただきました。本当に心から感謝を申し上げます。市民の皆さんのこの問題に対する関心の高さを実感しているところでございます。

砂川市はご承知のとおり、今「地域で高齢者を見守る・支えるしくみ」について市民説明会を開催中でございます。これまで様々な団体と話し合いをさせていただき叩き台ができました。市民説明会の中で市民の皆さんの色々な意見を取り入れ、12月の議会に条例案を提出したいと思っております。その内容につきましては、65歳以上の高齢者の基本4情報を福祉目的で社会福祉協議会を通して各町内会に提供していきたいと考えています。

また、日頃の見守り活動については町内会だけではうまくいきませんので、砂川市はこの見守りだけを専門に担当する職員を配置し、その職員と地域包括支援センターが中心となり、社会福祉協議会、町内会、民生児童委員で情報を共有しながら地域で高齢者を支えていきたいと考えております。どうしてこのようなことをするのかといいますと日本はかつて繁栄をしてきました。しかし、豊かさの代償に地域コミュニティという大事なものを少しずつ失ってきました。また、それに伴って、誰も経験したことのない超高齢社会に日本は突入しています。砂川市も例外ではなく現在32%の高齢化率、今後あっという間に40%になります。これをどうしても放置することはできない。このままでは地域が崩壊してしまうということでこの問題に取りかかったところでございます。

今日の基調講演の講師である吉田太一さんは、遺品整理専門会社キーパーズを2002年に興しました。この吉田さんのブログを見ますと、日本で一番亡くなった方の部屋に入った人間、いわゆる孤立死を日本で一番見てきた方でございます。この吉田さん、遺品整理を職業としてございますけれど、一方では死に様から学ぶ生き様ということで孤立死を社会問題として取り上げ、年間50回以上ほぼ毎週全国を講演で飛び回っている方でございます。この講演の終わった後に意見交換会がございます。どうか皆様方にはこの講演の後の意見交換会において様々なご意見をいただくことをご期待致しながら開催に当たりまして一言挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願い致します。

【司会 鶴羽 佳子】

主催者を代表致しまして砂川市長善岡雅文より皆様へのご挨拶でございました。それでは第1部基調講演をお願いしたいと存じます。市長からプロフィールのご案内がありましたけれど、吉田様は大阪生まれで、今から18年前に全国初となる引越し屋さんのリサイクルショップを立ち上げメディアの反響を呼びました。そして10年前には全国初めてとなります遺品整理の専門会社を立ち上げました。今では東京、名古屋、富山、大阪、福岡、北海道、北九州そして韓国に支店を構え、年間1500件に及ぶ遺品整理サービスを提供しています。

また、1年間に300件を超える孤立死の現場の中から、独自の立場から社会問題を提起しています。1年前には映画のモデルにもなりました。吉田太一様どうぞ講演をお願いしたいと存じます。講演のタイトルは「最期まで孤立しないために。遺品整理の現場から学ぶ。」でございます。

【講師 吉田 太一】

こんにちは。吉田でございます。砂川には初めて来ました。旭川には僕の小学校の友達がフランス料理のお店をやっております。もし旭川に行ってフランス料理を食べたい時はうちの会社に電話してください。住所とか電話番号教えますから。北海道には最近しょっちゅう講演に呼ばれるんですけど、来月も富良野とか北見とか根室とか帯広も来月はやらせてもらおうと。だから全然仕事している気分じゃなくて、旅行かなと思ったりします。お金ももらって電車賃も出してもらって北海道に行くなんてことは本州の人間から見たらほんまに夢みたいな話でね。

でも僕なんかまだ48歳です。周りから先生って呼ばれることもありますけれど、先生といたら先に生まれた人の話ですから皆さんのほうが先生であるし、その人の前で命とか生きる話を僕がするのは本来、おかしい話です。逆に教えてもらいたい立場なんです。先ほどご案内いただいたように死んだ人の家に一番行った人、経験があると、そこで市長もおっしゃっていたようにその人の家の中を見ているとその人に会ったこともないのにその人がどういう性格でどういうことを職業としていたとか、そういったことももちろん分かります。そうやって関心をもって見るとその人の像というのが出てくるんですね。この

仕事はやっぱりそういう仕事ですので、5年、6年経ってくると家の中に入っただけでそういう声が聞こえるようになってきた。嘘ですけどね。聞こえてくることはないですけど、その人の生き様というのがよく見えてきます。中には悲しい死に方をしてしまった人もたくさんいる訳で、僕たちはそこに行って無意識のうちにそれを見ていると、もちろん仕事で行っているし当時はそんなことを考えていません。ただブログというものを書きだしたり、本を書きだした時に振り返る訳ですね。今までの経験の中で出会った出来事を書くために何をしたか振り返る訳です。人間というのは振り返った時に初めて得るものが非常に多い訳です。だから当時2002年から5年近くまでは正直言って、こういうお話をするなんて考えてもいませんでした。それでそうやって振り返った時に色々なものに気づきだした訳です。その中で無意識のうちに自分自身の考えも変わってきたなど。一番変わったことは、こういうことが現実にあることを無意識のうちに意識した。いつ誰が孤立死しているかもしれない。それで自分がこうなりたくないという気持ちが強くそこに根付いてきたというかね。絶対こうなりたくないという気持ちがあった訳です。故人は、かつこ悪い姿を晒しながら「吉田君よう見とけよ」と。「自分みたいな死に方をしてしまったら、自分みたいになってしまったらこんな最期を迎えなあかんねんぞ」と。「だからちゃんとよく見ときなさい」と。このようなことを身をもって示してもらってるんちゃうかと。それで無意識のうちにそういうふうになっている訳です。それを本とかブログをきっかけに自然に求められるようになった。「吉田君とかキーパーズの社員は十分わかってるやろ」と。でも世の中の人たちはみんなそういう現場に行ってみることはできない。だから紙に書くなり、こうやってお話をするなりということで、もしかしたら死んだ人たちが僕を操っていてここにおるのかなと。そういうことかもしれませんね。自分自身がこうなるとは全く思っていないでしょうし、他人事だと思います。僕自身もこういう仕事をしていなかったら多分思っていなかったと思うんですけど。今日は僕の会ですからね。僕が今まで見た中、聞いた中でここがおかしいな、こうしたらええんちゃうとか、僕はあくまでも僕の目線で見ただけです。こうも見えるでしょう、こういった見方もあるんですということですから、自分なりに都合よく解釈していただいて、今日来たことが明日から生きるための、元気になったりパワーになったらいいなと。現場の話ばかりを僕の主観で見た、そういう話もたくさんさせていただきます。若干時間が短めですので、今日は後半になると早口になるかもしれません。ちょっと分かりづらいことがあればその時、後で皆さんとお話をする時に聞いて下さい。

それで全国初の遺品整理屋さんですが、僕がちょっと前から気にしていたことがあって、例えば「君は全国初の遺品整理専門会社を作ったんだよね」と言われて、じゃあ聞くけど「遺品とはなんだ」と聞かれたら答えられない。まずいと思ったんですよ。だけどそれが中々こう結びつかなくて、適切な言葉で返せなかったのですけれど、ここ数年前からなんとなくこんなもんじゃないかとまとまってきて、そういう考え方もあるんだなと思って聞いてもらいたいんですが、まず遺品といえればちょっと気持ち悪いと思われがちなんです。身内の遺品はそうでもないけれど、他人の遺品なんか気持ち悪いと思う人がいるけれ

ど、これをまずなんとかしないとイケないと思うんです。どうして気持ち悪いかといたら死んだ人が使っていた物だからという人が多いんですね。今何人か頷いてくれましたけれど、ほんまに死んだ人が使っていたらほんまに気持ち悪いですよね。しかし、別に死んだ人が使っていた訳じゃなくて死ぬ前に使っていただけで、死んだ人と同時にテレビも潰れたんだったらテレビの死骸やから気持ち悪いのも分かるけれど、使っていた人は死んだけれどテレビはそのままですよ。なのにテレビは上からシールでぺたっと遺品と貼られて、遺品だから気持ち悪いみたいな感じになっている。ちょっと極端かもしれないけれどこういうイメージですね。だけど皆さんは自分が死ぬ時は、分からないですけど、もし分かっていたらどうしますか。まだまだ使える物は誰かにもらってもらおうとか売りに行ったりとか何かちょっとでも自分でしたいと思う訳です。人間というのはいつ自分が死ぬか分からない訳ですから、そこにきて自分の部屋に残された家財道具というのは長く連れ添った大親友みたいなもんで気に入った物ばかり買って家に置いてある訳ですね。だから実際はそこに命は宿っていないかもしれないけれど、そこにある遺品と呼ばれる家財道具、これは何よりも良く言うことを聞く、こういった物によってあまり意識してないかもしれないけれど癒されている訳です。それで、これを残して天国に行ってしまった。それで皆さんが天国から見た時に、いつまでも自分の荷物が残っている状況であれば、天国は天国で友達もできると思うんですけど、気になってすっきり死んだ気になれへんと。それをきちっと綺麗に片付けて自分の生き様を体だけでなく、最後に綺麗に無くなったことによって完全にこの世を仕舞うことができるんだと思えるだろうと。だから僕らは最後の最後、存在していたという証拠や生き様というものを消し去る仕事を遺品整理として、遺族がすればいいんだけど、できない状況が増えてきたので遺族の代わりにやっている。だからごみ屋さんではないんです。遺族がやる部分を全部するんです。親戚が集まっても火葬が終わり納骨も全部終わったとして部屋がそのままの状態で親戚が集まるとしますよね。だから昨日終わったばかりで、みんなが分かっているのに会話の中でまだびんとかないねとか、「ただいまって帰ってきそうな気がするよね」となってしまうのはそこに生活がそのまま残っているからです。それが完全に綺麗に無くなってしまおうと何も無い部屋に親戚が集まり死んだことがより認識される訳です。そういう意味ではあまりその人の生き様が中途半端に残っているのではなく、綺麗に片付けるというのは意味があることかもしれない。そういうことまで現場に行っていると学べるということです。

それで今から20分間DVDを流します。これはアニメーションです。作った目的はショックを与えるためですからちょっとくらいはショックを受けてください。ただ暗くなるのでちょっと眠たくなりますけれど、言っておきますけど僕の話聞くよりこちらのDVD見るほうがよほど価値がありますからね。DVDさえ見てもらえればあとの話は眠たかったら寝ても大丈夫ってくらい、それくらいDVDには自信をもっているんで、あの僕の作った監督作品第1弾ですから。アントキノイノチじゃないですよ。ちょっと怖いタイトルですけど孤立死というDVDを流します。まずは20分間それをご覧ください。

(DVD上映)

【講師 吉田 太一】

いかがでしたでしょうか。割と上手に作っていたと思うでしょ。できた時も僕はこれ凄いなと思いましたが、逆になんでこんなドラマが書けたんだろうかというのが凄く不思議で自分で前もって予習したりとか考えたことでなくて、こういうものを作ろうと思ってその場に行って下書きなしでずっと打ち合わせをしてきたんですね。初めは半分だったんですよ。「あなたは大丈夫ですか」というところでショックを与えて終わりと思っていたんですけれど、それからやっぱり色々と考えて、もしそういうことになった時にそのあと何が起こるかということを知っておくことによって、みんなに迷惑をかけることを起こしてはいけないという強い気持ちを持ってもらったらいんじゃないかということでそこも書こうと。

これは高齢者の問題とっているかもしれませんが、うちの会社では月によっては変死状態で発見される人の数が50歳代の人が多い月もある。だから決して高齢者だけの問題ではないということで、元々は「独居老人の孤独死」というタイトルだったのですが、それは独居老人だけの問題ではないのでそれを外して孤立死という言葉にした。それで孤独死という言葉について、自分の言いたいように言えばいいんですけど、相手に対して言う時は孤独死か孤立死か客観的に故人に断りもなく決めていい訳ですから孤立していたのが周知の事実であれば孤立死だね。ということでいいんですが、第三者があの人には孤独死だ、孤独だったんだというのは失礼になるので、あまり孤独死という表現は適切じゃないのかもしれないなど。あまりこだわることはないんですけど、自分がそう言われた時に嫌じゃないかなど。そういうことを考えて僕は孤立死に統一しています。それで実際に孤独死か孤立死かという言い方の問題ではなく、孤独死か孤立死を無くすことを意識している人もいますけれど、それはちょっと違って、まずその無くす必要性があるか、ないか。人間はいつか死にますから死に対して良いも悪いもないと。それで孤立死が良いとか悪いとかいうのもちょっと失礼な話やないかということもあります。それは周囲に与える影響を考えれば、決して良い亡くなり方とは言えないので、無いほうが良いのですけれど、ではそれを減らすため何人孤立死があるかということが特定しないと取り組みをしても減ったか分からないんです。警察も何も調べようがないんですから。うちでさえ孤立死らしきという表現をしています。勝手に孤立死と言ったら怒られるからね。僕が見たら「これ孤立死やな」という感覚的にそれは分かりますけれど、厳密にそれを数字ではじき出すのなら全部それを調査しないとイケない。ご近所に「あの方はどうでしたか」「交友関係はありましたか」と聞いてこの人は孤立していたから孤立死と認定する。こうやらないとイケない。そんなことをやる必要はない訳ですよ。でも正直言って皆さんもう気づいていると思うけれど、社会一般的に孤立している人の率がどんどん増えているやろなど。要するにコミュニケーション能力がだんだん退化しているということで、先ほど市長もおっしゃいましたけれど、確かに自由を追い求めて便利な環境はできたけれど、いつの間にか煩

わしさを放棄していった。そのツケが回ってきた。そのツケというか代償によってだんだんその機能が退化している。そういう人たちの世代を見て僕たちの世代もみんな煩わしきは避けるべきだと。だんだんだんだん人間関係が乏しくなっている。それはそれでいいんだけどもったいない。せっかく生きているんだから、やはりそういう状態ではもったいないので孤立する人を減らしていこうと。できるだけ色々な人とコミュニケーションをとれる機会を増やしていこうとか、そういう意識を持たせるようにしよう。そういうことをしていれば孤立する人を徐々に減らしていくことができると思いますから、孤立死なんて言葉は抹消してもいい訳ですよ。とにかく孤立死を問題にするよりは、孤立しているスタイルを意識して、それをちょっとでも減らしていくようにしていくのが一番大切であると思っています。

それでこの孤立死らしき現場で年間200件くらいあるんですけど、多いのは男性です。男性が非常になりやすい環境にある。それは体調の問題とかそういうものではなく、どうして男性が多いかというとな性はコミュニケーション能力が低いというのが一つ。僕なんかはべらべら喋っているように見えますけれど、これは目的があるから喋っているだけであって、理由があるから会話を続けられるんです。女性と男性の脳みその作りは元々違うらしいですけど、男性というのは結果とか目的が、その先になれば長く話を続けることができない。女性は目的も結果もなくともいつまでも喋ることができる訳です。それでこれは何かというと、女性は目的がなくても喋りたいんですね。要するに会話をストレス解消法にできるけれど、男性は会話をストレス解消なんかに使えなくて、目的とか結果がなければ喋ることができない。

結婚というのは女性の経済的不安と男性の生活の不便をそれぞれお互い引っ付くことによって成り立っていたんですね。それで男の人が仕事を辞めたらどうなるか。定年退職した人はいいですよ。まだまだみんな働いているのに職を失ってしまうと男の人はもの凄く劣等感というか凄いい気持ちになる訳です。そういう人たちが見放されてしまうとどんどんどんどん引きこもってしまう。それで元々独身の人はどうかというと、その人たちも仕事を辞めてどうするか。次の仕事もそんなすぐには見つからないでしょうし、それでそういう人たちは家の中でごろごろして過ごしていくんですけど、そうすると1週間くらいしたらコミュニケーション能力が退化していくんですね。それで50代後半でもお爺ちゃんみたいな人がいるんですね。体調が悪い人もぼちぼち出てきます。それでこういう人たちが助けてと言えない状況になる。それでこういう人たちは見放されてしまいます。そういう人たちが多いことを比較的現場で感じている。

去年の2月くらいにまだ寒かったんですけど、たまたま福岡支店に行っている時にたまたま人がいなくて急遽入った見積もりがあったんです。急遽入った見積もりは北九州市のアパートで死後2か月で発見された。その見積もりが入ったのですぐ現場に行ってくださいと言われて。寒いけれどやっぱり2か月も経ったらちょっとしみがあつたり臭いもするやろということで臭いがとれる機械とかを持って気合いを入れて行きました。でも部屋に入ったら全然臭いがしないんです。ぱっと見渡してもどこで死んだかも全然跡がないん

ですよ。それでそこにいる60歳くらいの人に話を聞くと「このベッドで亡くなっていました。」と言って。それでも2か月だし臭いもするやろって思ったけれど全然臭わない。テレビや冷蔵庫もあるべきところがない。それで色々お話を聞いていて推測ですけど、3〜4か月前からお金が完全になくなって携帯も止められて、冷蔵庫やテレビもリサイクルショップに行って売って多少の金にして食べていた。仕事も単発でぼつぼつやったかもしれないけれど、ちゃんとした職に就けていなくてそれで最終的には死後2か月で、その2週間くらい前から何も食べていなかったんちゃうかと。餓死ですよ。それで建物とか部屋の環境によって腐る、腐りにくいというのはもちろんあるでしょうけれど、そういうことが実際にありました。それでこの人の年齢はいくつかというと、52歳です。52歳なんだから市役所に行ったり相談したらいいのにねって、だいたいの方は言いますが、僕らが社協さんとか包括の人に会って色々なところで話をしますけれど、どこの人も52歳の人に来て相談とかして生活保護の申請だとかしていたらきりがいいから無理だと。それが現状ですよ。そんな人が仕事がなくって周りの人にも相談しづらい、そんな人たちがこれからまだまだ増えていく。

話は変わりますが、民生委員さんという人が日本には凄くたくさんいらっやって、民生委員さんがいないと社協も包括も中々自分達だけじゃできない。その中で僕らの年代があと15年か20年くらいして60歳くらいになった時に民生委員ってどれくらい成り手があると思いますか。半分くらいになっているかもしれない。この問題は昔と比較すると問題かもしれないけれど、あと40年くらいしたらもう終わっている話で何もせんでも解決する話です。そんな時間が過ぎれば解決する問題に人もお金もいっぱいかけて対処している。あかんことじゃないし、それがあっていきいきとする人もおもしろいんですけど、実際にお金もないし人もいなかったらどうするかということですよ。最終的には自意識を高めてもらうしか仕方がないです。やっぱり自分がそういう立場になると自分が孤立している場合じゃない訳ですよ。それと危機感を持ってもらうと、自分はそうなりたくないという気持ちが一番孤立しない要素になってきます。そのためには何が重要かということ、「この先痛い目にあうよ」というのが他人事じゃなくて、ほんまに自分も可能性があるなと思った時に意識付いてくる訳ですよ。要するにその先になにかあるかはっきりさえすれば人間は今まで煩わしさを避けてきたその事実が、自分にふりかかることが分かれば自主的な行動によって自分の方向性を決めていこうとする。そういったことを今回のDVDを見て感じてもらえれば。人の手を借りずに自分自身の意思で回避していく。

遺品整理は人に迷惑をかけると思っている人がいる。でも僕だって自分の遺品整理はできひん訳やから遺品整理は人にやってもらうものだと考えてもらって。迷惑というのは自分ができることをさぼったりすることは迷惑かもしれないけれど、元々できないことは迷惑じゃない。だからちょっとくらいわがままに生きたほうがいいんじゃないかなと思っています。喋りたいことは非常たくさんあったんですけど時間がオーバーしてしまいました。ということでこのお話はここで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

第2部意見交換

○コメンテーター 遺品整理専門会社 キーパーズ(有) 代表取締役 吉田 太一 氏

○司会進行 フリーアナウンサー オフィス鶴羽 代表 鶴羽 佳子 氏

【司会 鶴羽 佳子】

ありがとうございました。それでは高齢者の孤立死防止について砂川市全体としての見守る・支えるあり方について皆様の意見をぜひ伺いたいと思いますが、まず主催者でもあります善岡市長にせっかくですから前に出てきていただいて、吉田さんの横にお座りいただいて感想をいただきたいのですがいかがでしょうか。よろしいですか。それでは感想と高齢者を見守るしくみについて短めに善岡市長お願いします。

【砂川市長 善岡 雅文】

感想から言いますと関西弁でのお話を楽しく聞かせていただきました。特に孤立化のところでの男女差、女性はいつまでも話ができるというのはなんとなくそうだと思います。私が市長になりまして色々な団体を訪れるのですが、そこで見かけるのは圧倒的に女性の方です。社会意識が強いのは女性の方であると実感しております。

また、新しい条例には、もう一つの柱がありまして、この超高齢社会の中で死ぬ間際まで元気でいていただきたい。そのための助成を市がどのようにしていくかということを中心に検討しております。また、個人情報保護法があつて難しさがありましたが、条例化することによって高齢者の個人情報を福祉目的のために社協と町内会に提供する。そのような内容の条例は初めてですから、市民の皆様にご理解いただき浸透を図っていきたいと考えています。それで吉田さんへの質問ですが、遺品整理専門会社ということで会社を興して今は年間70回ほど講演をしているとのことですが、現場を見ながら孤立死を無くしていこうと思ったきっかけはあったのでしょうか。

【講師 吉田 太一】

僕はわりは無責任で福祉的な意識を持つと、言いたいことも言えなくなるのであまりそういうことは考えないようにしています。それでどこかに将来NPOを作ると書いてあったと思うんですけど、それは僕が言ったことではなくて勝手に書かれたんですけど、こういう状態でおかしいことはおかしいと自由なことが言える立場でいつづけたいなというのがありまして、それで市長のいう通り自分の仕事が減るようなことをしております。たしかにそうなんですけれど、夏場なんてこんな話をしたらごつつ売上なんか下がる訳ですよ。それで従業員から恨まれているかということそうじゃない。従業員も現場にいて影響を受けるとやっぱりその辛さとかを感じているので結果としてこういうことになっている。気づいたらこういうことをしている。ただ今後、孤立死が無くなっていくぐらいの影響を僕が与えられたら仮に仕事を失っても、仮に神様がいたとして違う仕事を与えてもらえるんじゃないかなと。そう思っています。ちょっと楽観的な気分です。だから本当に皆さ

んが思っていたほど大層な考えは一切ないです。僕はあくまでも一番しなきゃいけないことは、従業員に給料をあげて最低限なことをしっかりしていくことです、だから僕の会社がやっていることを分かってもらうとか自分のモチベーションを保っていくとかです。だから結果として皆さんがそう感じていることに対してそれはやりたいと思うし、引き継ぎたいと。

それで皆さんの手元に配っている「おひとりさまでもだいじょうぶノート」があります。これは全国で12万冊作って無料で配布しているんですけど、これも結局目的はないんです。仕事をしてお金をもらうんですけど、そこで色々な情報ももらってきます。それでお金は給料等にしていきます。それでちょっと残るんですけど、もらってきた情報を知らせるといことにしています。それで僕の目的としては、小っちゃい会社ですんで他の会社が無料でずっと配り続けるというのは多分しないだろうと。他の会社がやらないことをやりたいということと、誰もやらないことをやっていたらお金や仕事にならなくても10年、20年作り続けていけば、その先に面白いことがあるんじゃないかと。そういうことです。この仕事もそうですよね。皆さんが人の死に様から生き様を感じることがないと思ったので、僕の経験を皆さんに興味深く聞いてもらう。だからこういったことばかりを自分が好きでやってるといことです。

【司会 鶴羽 佳子】

はい、ありがとうございます。ただ吉田さんがこの企業をされなければ遺品整理という言葉がこんなに社会的に知られることもなかったと思いますし、本当は家族がするのがいいんでしょうけどできない方もいらっしゃるし、そういう人に対して安心感も違うのかなと感じることができます。それで会場の皆さんからもぜひ砂川全体の既に地域で皆さん活動されていると思います。そんな活動の中で見守る・支えるしくみがどうあるべきか課題は何か活動されて感じることを手をあげて、もちろん吉田さんへの質問でも構いません。何かございませんか。

【市民】

私は砂川で成年後見人の活動をしている者なんですが、先ほど吉田先生のお話の中で実際生きていて依頼をしたいとお話がありましたが、その中で親族にも遺品整理はしてもらいたくないという方がいるとおっしゃっていましたが、そういう人のお部屋というのはどんな感じなんでしょうか。

【講師 吉田 太一】

そういう人たちはまだ生きていて人とか話をしたことがないので、亡くなった人がそういう人かどうかは分からないんですよね。成年後見、後見制度については市民後見人とか社協さんが後見人になると色々やっていますけれど、非常に難しい問題ですが、僕が思っているのは公正証書というのは日本でちゃんと書いているのは10%もない訳です

よね。それで後見人の話になってくると、死ぬ前の正式な公正証書に基づく遺言みたいな、生きている間にそういう遺言みたいなものがあれば、日本の後見制度はもっとよくなるんじゃないかと。逆にそれがなかったらあまり普及しないんじゃないかと思います。それでこれからは後見人になってもらったとしても経済的にお金が少ない人もいますし、社協もお金が少ないからアウトになってくるでしょうし、大変になってくると思います。難しい問題になってくると思いますけど、それはそれで頑張ってもらいたいと思います。

【司会 鶴羽 佳子】

そうやって意識をもって活動されてる方がいらっしゃるというのは本当に心強いなと感じます。ありがとうございます。では地域の中でリーダーとして活動されていらっしゃる方にご意見を伺いたいのですが、町内会連合会の会長として、社会福祉協議会の会長として活躍されていらっしゃいます。小関徹会長に一言いただきたいと思います。それではお願いします。

【町内会連合会会長 小関 徹】

ご紹介に預かりました小関と申します。「地域で高齢者を見守る・支えるしくみ」について本年の8月25日に市からご説明をいただいたところです。振り返れば平成7年に初めて北海道の指導を受けて小地域ネットワークに取り組みました。それで砂川には87町内会があり、そのうちの67町内会が福祉活動に取り組んでいますが、最近はそういう取り組みをしながら孤立死が出たということがありました。本年の福祉活動研修会における、講師のお話で孤立死は絶対に防げないという話がありました。したがって町内会の皆さんはこのお話で少しは楽になればと。願わくばそういうことがないように思っております。それで社協でも自立支援ということで様々な取り組みを行っていますが、特に「いきいきふれあいサロン」ということで、先ほど吉田先生がおっしゃっていましたが、やっぱり出てこない方というのは男性が多いんですね。しかし最近、非常にこの活動に対してぜひ指導をしていただきたいという要望がありまして、できるだけ住み慣れた地域でできるだけ長く住み続けたいと日々に活動しておりますので、吉田先生の話も私としては非常に大事な話だと思っておりますし、願わくば皆さんも孤立しないように一日一日を楽しく生きながらえていただきたいと思っております。これからも陰ながら応援をしながら取り組んでいきたいと思っております。これが答えになっているか分かりませんが今この町内会について述べさせていただきました。ありがとうございます。

【司会 鶴羽 佳子】

ありがとうございます。小関さん本当にありがとうございます。力強くありがたいご意見でしたけど吉田さんいかがでしたか。

【講師 吉田 太一】

僕は全国を回っていますけど一番多いのは社協さんなんですね。だから一生懸命取り組んでいるのは常々感じております。ただ理想と現実の狭間で実際にいかにいい取り組みをしても地域の人が中々聞いてくれないということもありますし、世間からまだちゃんと認識されてないので辛いと。でも現実にはかなりの取り組みが高齢者の暮らしにゆとりを与えているというのはあって、これから社協さん自体が自立度を高めていかないといけないと思うので、その辺をぜひ頑張ってもらいたいと、それで一般の人たちにももっと社協を広めていかないといけないな、と思います。

【司会 鶴羽 佳子】

ありがとうございます。実際社協や町内会もそうなんですけど関わりがある方もいますけど中々分からない方もいらっしゃるのかなと思いました。私としては「おひとりさまでもだいじょうぶノート」の中にキーパーズから送るおせっかい9か条の「遠くの親戚より近くの友達をたくさんもちましょう」というのが非常に惹かれたんですけど、会社の代表としてはこのように感じられますか。

【講師 吉田 太一】

やはりいくら親しくたって遠かったら役に立たん訳ですよ。それで近くに親しい人が何人いるかでこれから先の人生も変わってきますし、リスクが減るということもあります。浅く広くでもいいから会う人たちをつくったほうがいいと思います。

【司会 鶴羽 佳子】

ありがとうございます。こうしてお話をしていますとあっという間に最後になってしまっていて、最後に皆さんにお話を吉田さんから、はい、あ、質問ですね、どうぞ。

【 市 民 】

時間が過ぎているのにすみません。旭川からお話を聞きにやって参りました。先生は現場は遺品整理ですのでその遺族か弁護士さん等から連絡があると思うんですけど、そういう孤立死した人というのは葬儀をした形跡はあるのでしょうか。

【講師 吉田 太一】

お葬儀の話はまた面白い話で話すと2時間くらいかかってしまうんですけど、基本的に孤立死している人もしてない人も日本の法律上火葬はしなきゃいけないんですよ。なので必ず火葬はされます。ただ私たちが依頼を受けるケースというのは基本的には遺族がいる方なんです。もちろん弁護士とか司法書士とかからもたまにありますけれど、あくまでも斡旋ただけで遺族から来ます。だからうちのところに来たものは火葬はしています。ただ大々的なお葬儀というのは少なくなっていますね。火葬のみか、火葬と家族でご飯食

べて終わりとかそういうのが多いですね。

【司会 鶴羽 佳子】

それでは次が最後の質問ということでお願いします。

【民生児童委員 澤田 幸三】

民生委員をやっております澤田といいます。今全国的に民生委員の成り手が少なくなっております。欠員が多く出ている市町村も多い訳ですけど、先ほどの講演の中で「民生委員は20年後は半減しているでしょう」とおっしゃっていましたが、どのような考察でそのようにお考えなのかと思ひまして質問させていただきました。よろしくをお願いします。

【講師 吉田 太一】

まず一つは人口が減っているということですね。それに反して高齢者の数が増えていきますけれど、基本的にその部分があることと、やはり煩わしいとかそういうことに時間を使うゆとりがなくなってきている。やはり、今までの中で皆さんこういう人生を送ってきて、できたらこのまま死にたいんですけど、今の20代、30代は学校を卒業するまでは親のおかげですからいいですけど、そこからこういう状態になるだろうと思っている訳です。実際に仕事もないし、こうなろうとは絶対に思っていないです。それでいて自分の生活もちゃんとできるか分からないのに、やっぱり人の面倒を見るというのは単純に変だろうというのが僕の考え。

それともう一つ、僕が一番危機感を感じているのは、今年成人した人の半分は恋人がいなかったんですね。それで適齢期といわれる18歳から30歳の男子の60%に相手がないんです。女子は50%という数字が出ていた。それで、これを聞いてそんなことないやろと思う人も最近いなくなっているんです。それでこの数字が事実だとしたら10年後には何%になっているだろうと。20年後、30年後に独身の比率が上がると。それで人間というのは、僕もそうですけれど、子どもとか嫁とか親がいるからということで歯止めがかかっている訳です。だけどいなかったら正直言って歯止めがきかない人がたくさん出てくるんです。こういう状態を考えるとその先にある民生委員の数というのは考えると暗くなってしまいますことですね。一番いいのはあと30年くらいたてば、無責任な人ばかりになるからそれまでに死んだほうが嫌なものを見なくて済むかもしれない。冗談ですけど本当にそういう時代だっということ私たちが高齢者のために色々なことを協力してやって、より良い楽しい人生で終われるようにするということは必要だと思います。しかし、そこばかりじゃなく、今の若い人たちのことを見て自分たちが作ってきた時代の反省をしないと最終的には良い人生で終われない。だから両方意識しながら生きていかないと僕には僕は生意気ですけどそう思っています。

【司会 鶴羽 佳子】

ありがとうございます。本当に忙しい中、短い時間だったんですけどありがとうございます。2回目があれば葬儀のこととか色々なことを期待して、この会を閉めたいと思います。吉田さん、そして市長に大きな拍手をお願い致します。会場の皆様もお忙しいところありがとうございました。全国各地で色々な現場を見られた吉田様ならではの直球なお話もありましたし、ショックなところもあったかもしれません。でもこれは現実のことですよね。ですから切ない部分はあるかと思うんですけど、そこを勇気をもって見ること、充実した人生を過ごせるからこそ、他の地域の高齢者の見守りや支えにも生きるのかなと思いました。本当にありがとうございました。